

フィジー、ラグビー事情 昭和34年卒 石塚雅彦

ことし7月フィジーを訪ねた。成田からエア・パシフィックのボーイング767で8時間あまり南下、玄関ロナンディに着く。日本より3時間進んでおり、オーストラリア北部から東に2000キロほどの位置だ。夢のような浜辺、そしてラグビー王国としてなじみ深いフィジー（1970年英国より独立）は、南太平洋に散らばる島国の一つである。

この国の男は皆ラグビープレーヤーのように見える。ナンディのホテルのボーイがいかにもそうだったので「やっているのか」とたずねると、「土曜日の試合でケガをした」といって足首を見せてくれた。タクシーの運転手も「89年に、アンダー19のフィジー代表選手としてオーストラリアに遠征した。日本ともやったよ」と言う。

村のちっぽけな草原にも、あり合わせの木で作ったような、かしげたラグビーボールが立っている風景がこの国のラグビー熱を物語っている。今年、ホンコン・セブンスで優勝した時には、政府は急きょ祝日を宣言したほどである。

フィジー・ラグビー協会によると、フィジーは人口比でラグビープレーヤーが世界一多い。人口90万に対しラグビー人口は6万人（学生2万人、一般4万人）。しかし、フィジーの人口の4割は、イギリス植民地時代にサトウキビ労働者としてインドからつれて来られたインド人の末裔で、この人たちはラグビーはやらない。ラグビーをするのはもっぱら体格の良い先住民（メラネシア人とポリネシア人の混血）の人たちである。

フィジーのラグビーで何よりも驚き、印象深かったことは、ラグビーグラウンドで聞いた讃美歌とお祈りだった。フィジー先住民はみなクリスチャンなのだが、ある高校のラグビー部の練習を見学した時のことだ。始まる前に選手たちが円陣を組んだので気合を入れるのかと思ったところ、皆で讃美歌を歌い、キャプテンがお祈りを捧げたのである。

次の日、土曜日だったが、首都スバの市庁舎のそばにある広場では、4面あるラグビーグラウンドで朝から日暮れまで、市内のクラブチームが次から次に試合をしていた。そこでも試合を終えたあるチームが円陣を組んで讃美歌を歌い、キャプテンが膝まづいて長々と祈りをささげていた。勝ったのだそうで、感謝の祈りだったのだろう。日曜日は教会に行くので試合はしない。

もちろん、讃美歌とお祈りだけではない。激しく気合も入れるし、オールブラックスのウォークライのような踊り（ハカ）も見せる。スバの国立競技場で高校地区大会の決勝戦を見たが、試合よりも耳を聳せんばかりの応援合戦のすさまじさが面白かった。

フィジーは1人当たりGDPが2千米ドルという貧しい国である。ラグビー協会のナイベリ財務担当理事にも会ったが、「フィジーのラグビー界にとっては資金難が一番の問題」と語っていた。ラグビーのプロ化とグローバル化が進む中、いい選手がオーストラリアやニュージーランドに引き抜かれ、世界ランキング9位を維持するのも大変だろうと思われる。最近では日本にも選手が来ているが、両国ラグビー界の交流強化を望みたい。

